

我々はもっと想いを記述すべきである

～ 認知症や発達障害などの自己表現から診断・ケアへ～

四方 朱子[†]
木下 彩栄[‡]

宮部 真衣[†]
荒牧 英治[†]

京都大学 学際融合教育研究推進センター[†]
京都大学 医学研究科[‡]

1. はじめに

言葉は、単なるコミュニケーション記号を超えて力を持ちうる。政治学者のベネディクト・アンダーソンは、言葉が「同じ集団に対する帰属感」を形成すると述べる [1] が、このような帰属感とは、社会のいたるところに見られ、例えば、病を宣告された患者は、医学書のみならず、同じ病を持った患者の声を書籍や Web 上に求めることがある。このような患者＝〈当事者〉の声は、Web の発展とともに、近年、徐々に注目されつつあり、彼らの言葉を傾聴する試みが医学、看護学、言語学、社会学など多方面から試みられている。本研究は、彼らの言葉の疾患予測への応用を試みようとするものである。

我々は、その実践の足がかりとして、認知症と発達障害の当事者の語りを分析し、将来的にはその診断が、彼らのケアや自己表現と両立できる可能性を探っている。

2. 関連研究

認知症当事者の語りを量的に抽出する先駆けとなった研究として、1986 年に米国で開始された Snowdon & Kemper らを中心とする *Nun Study* [2] が有名である。これは米国のノートルダム教育修道会の修道女 678 名の日記の言語能力などを分析したものであり、研究の概要が書籍として出版されている [3]。この研究の特筆すべき点は、認知症が発症する 50 年も前の言語能力からその発症を予測できる可能性を示唆したことである。

しかし、本邦においては未だ認知症と言語能力の関係を大規模に調べたこのような前例は無く、日本語を母語とする話者の言語能力と認知能力との関連を早急に確認することが求められている。

その他、語りが注目される疾患は多数ある。たとえば、自閉症スペクトラム (以降 ASD) は「社会的コミュニケーションと社会的相互作用における持続的な欠損」と「行動、興味、活動の限局的かつ反復的なパターン」の二つの特徴によって定義される神経発達障害である¹。日

本人の 100 人あたり 6.5 人が ASD であるとも言われており、高血圧や糖尿病とならぶコモンディージーズである [4][5] が、ASD 者の根幹とされる社会性の問題などの向上を図る方法論などは確立していない現状がある [6]。ASD は、他者の気持ちを推定する「心の理論」と語りの相関がみられるなど [7]、当事者の語りが注目されることが多い [8]。しかし、これまでの語りの研究の多くは、その質的研究の側面が強く、研究者の内省に頼るところが多い為、最近では、当事者の〈語り〉を定量的に扱うアプローチが注目を集めている [9]。本研究では、これら 2 つの疾患を対象に語りの可能性を模索する。

3. 材料と方法

①認知症当事者と高齢者

・認知症当事者データ：認知症 (アルツハイマー型) 当事者 (男性) のブログ執筆開始 (67 歳) から 5 年間のテキストを執筆年ごとに 500 文ずつ収集 (n=1)。

・高齢者データ：4 つのリンク集から執筆開始時点で 65 歳以上 70 歳以下、かつ、5 年以上の期間にわたって執筆を継続している男性のブログを無作為に抽出、執筆年ごとに 500 文ずつ収集 (n=5)。

②ASD 当事者

大人の発達障害のためのピアサポート施設、*Necco 当事者研究会*を通じて得た ASD 当事者の自伝的語りの書き起こしテキストを用いた。

・ASD 当事者データ：会合 (開催期間：2012 年 9 月 3 日～2013 年 8 月 21 日) 参加者 76 名のうち、研究協力に同意し、かつ、SRS-2[®]による自閉症測定をした人々のテキスト (n=16、内、男性 n=7、女性 n=8、不明 n=1)。

①、②で得たそれぞれのデータについて、日本語学習語彙レベル (Japanese Educational Lexicon Level; JEL) [10] を測定した。JEL は日本語学習辞書に記載されている語彙レベルを用いた語彙の難易度で、そのうち、中級レベル以上の語の出現の割合によって定義されている。

4. 結果と考察

①認知症当事者と健常高齢者の測定結果を図 1 に示す。総合 JEL (JEL, 図 1 左)、名詞のみ抽出した JEL (名詞

**We Need to Speak Out Our Feelings:
Dementia and Developmental Disorder from Self-expression to
Diagnosis and Treatment**

Shuko SHIKATA[†] Mai MIYABE[†]
Ayae KINOSHITA[‡] Eiji ARAMAKI[†]

[†]Center for the Promotion of Interdisciplinary Education and Research, Kyoto University

[‡]Graduate School of Medicine and Faculty of Medicine, Kyoto University

¹ 内閣府 障害者白書平成 25 年版 2014

[‡] <http://www.tobyo.jp/>, <http://ameblo.jp/ryu280/>,
<http://mooyan.air-nifty.com/>, <http://blog.livedoor.jp/mataichi000/>

[®] The Social Responsiveness Scale[™], Second Edition.

ASD 者の社会的生きづらさに注目した評価であり、5 つの処遇下位項目がある。

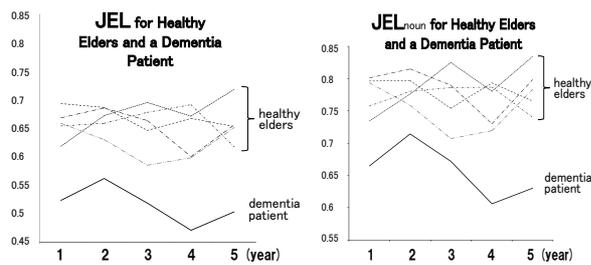


図 1: 認知症当事者と健常高齢者の執筆開始後 5 年間の JEL 値および名詞 JEL 値の変遷

JEL, 図 1 右) では、全体的に名詞 JEL がより高値を示した。また、認知症を発症すると、両 JEL 値が低下、つまり、難易度の高い言葉の使用頻度が、時間経過と共に減少傾向をみせた。また、認知症当事者と健常高齢者を比較すると、使用言語の難易度に差があり、認知症当事者は最初から難易度の高い言葉を使用していないことがわかる。このことから、認知症のごく初期の段階において、言語能力の激しい低下が見られる可能性があり、この知見を用いての認知症の早期発見が期待される。

ただし、今回の認知症例はサンプル数が 1 であり、今後大規模な調査を行う予定である。また、テキスト収集を行った 2014 年現在において、ブログ執筆が可能である高齢者は、そもそもが特殊群であり、ここにバイアスが生じている可能性がある。この点に関しても、今後より統制のとれたサンプリングを計画している。

②ASD 当事者の測定結果を図 2 および表 1 に示す。図 2 のように、男女混在の SRS-2 高値群 (n=10) 低値群 (n=6) の差は有意傾向 ($p=0.079$) を示し、男性のみの SRS™-2 スコアの高低別でも有意傾向 ($p=0.078$) が見られた。尚、今回女性に関しては SRS-2 スコア低値群で n=1 となったため、差異の検証をしていない。

また、表 1 のように、5 つの下位項目の内、〈社会的認知〉と名詞 JEL 値との相関が有意であり、〈社会的動機付け〉との相関が有意傾向を示していることから、社会と関わるための語彙が乏しいことが、もっぱら ASD 当事者らと社会とのインタラクションを阻んでいる可能性が示唆される結果となった。

今回、特に、検証を行った ASD 者の数が 16 名という限られた人数であることは、相関を調べる折のネックとなった。今後更なる協力を求めることで、その数を増やす必要があると考えられる。

以上に加え、①はブログにおける書き言葉、②は話し言葉の書き起こしであるため、これらを単純に比較することはできない。今後は、書き言葉のコーパスをより収集するだけでなく、現在開発中の話し言葉をダイレクトに分析する機器による、より多くの測定を計画している。

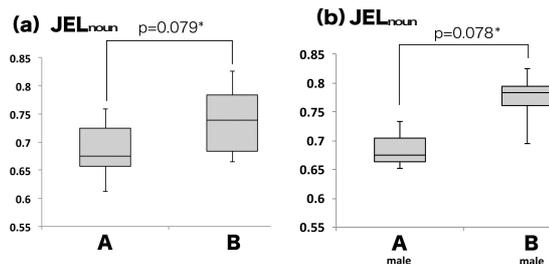


図 2: (a) ASD 当事者の SRS-2 高値群(A)低値群(B)の名詞 JEL 値 (b)内、男性のみの SRS-2 高値群(A)低値群(B)の名詞 JEL 値

表 1: SRS-2 下位項目と名詞 JEL との相関係数

	相関係数
社会的気づき	-0.140
社会的認知	-0.622**
社会的コミュニケーション	-0.295
社会的動機付け	-0.489*
限定された興味と反復行動	-0.287

** $p < 0.05$, * $p < 0.10$

5. おわりに

日本では〈秘すれば花〉等、自己表現をひかえることを美德とする文化もある。これを一概に否定するものではないが、この美德の影に隠され続けた言葉の力に注目し、当事者の言葉を抽出する研究を行うことによって、疾患の予測だけでなく、当事者の言葉を、彼らの自己表現の手段として社会に広める土台作りを計画している。

参考文献

- [1] Anderson, Benedict. *Imagined communities: Reflections on the origin and spread of nationalism*. Verso Books, 2006.
- [2] Snowden, David A., Kemper, S. J., et al. "Linguistic ability in early life and cognitive function and Alzheimer's disease in late life: findings from the Nun Study." *Jama* 275.7 (1996): 528-532.
- [3] Snowden, David. "Aging with grace." *What the nun study teaches us about leading longer, healthier, and more meaningful lives*. New York et al (2001). (デヴィッド・スノウドン著. 藤井留美訳. 100歳の美しい脳. 株式会社 DHC, 2004.)
- [4] Chakrabarti, Suniti, and Eric Fombonne. "Pervasive developmental disorders in preschool children." *Jama* 285.24 (2001): 3093-3099.
- [5] Ehlers, Stephan, and Christopher Gillberg. "The epidemiology of Asperger syndrome." *Journal of child psychology and psychiatry* 34.8 (1993): 1327-1350.
- [6] Barry, Tammy D., et al. "Examining the effectiveness of an outpatient clinic-based social skills group for high-functioning children with autism." *Journal of autism and developmental disorders* 33.6 (2003): 685-701.
- [7] NORBURY, COURTENAY, Tracey Gemmell, and Rhea Paul. "Pragmatics abilities in narrative production: a cross-disorder comparison." *Journal of child language* 41.03 (2014): 485-510.
- [8] Howlin, Patricia. "Outcome in high-functioning adults with autism with and without early language delays: implications for the differentiation between autism and Asperger syndrome." *Journal of autism and developmental disorders* 33.1 (2003): 3-13.
- [9] Griffith, James W., et al. "Current psychometric and methodological issues in the measurement of overgeneral autobiographical memory." *Journal of behavior therapy and experimental psychiatry* 43 (2012): S21-S31.
- [10] 砂川有里子. "学習辞書編集支援データベース作成について —『学習辞書科研』プロジェクトの紹介." 日本語教育連絡会議論文集.